CCI SABAE NEWS

随筆

経営の散歩道 一五七回

富山短期大学名誉教授 川中清司

毎日三十五度を超すかんかん照りの日が続く。油蝉も夜遅くまで鳴きじゃくり、畑の作物はうなだれてもうあとがない。さっと一降り、慈雨が欲しい。

日本経済ももうあとがない。企業倒産が増え続けている。２００１年上半期の倒産（負債額一千万以上）は、負債総額が七兆二一二〇億円で戦後二番目の高水準となった。東京生命（九千八百億円）をはじめ、大型金融倒産が相次いだ。

自民大勝したが株価は最安値を更新

国民は小泉首相の「聖域なき改革」に望みを託し、参院選は「自民大勝」に終わった。

ところが株価はそっぽをむいた。投票の翌日、七月三十日の平均株価は一万一五七九円と、十六年ぶりの最安値を記録した。

市場は「小泉改革」と日本経済の先行きに危惧を抱えている。

「株価には一喜一憂しない。改革なくして景気回復なし」という小泉哲学は結構だが、短期経済対策にも注意を払うべきだ。

不良債権の処理で不況の懸念

不良債権は依然として増え続けている。金融庁の発表では三月末現在で、全国の金融機関の「リスク管理債権」の総額が四十三兆円に上った。前年比で一兆四千億円も増加した。

「破たん懸念先以下」の不良債権の最終処理を行った場合、少なく見て倒産は二万件、失業者は新たに二十万人発生する（商工リサーチ）。消費マインドはさらに落ち込み、景気の足をひっぱる。

小泉路線は、二・三年で不良債権を処理し、そのあとは自立回復をねらうが、その先どのように景気回復に結びついていくのかが読めない。明確なシナリオが示されていないため、投資マインドが盛り上がらない。

改革と景気

中小企業はこれ以上の「痛み」に耐える体力が乏しい。

与党内にも、「景気を悪くして不良債権処理をやったら、どんどん不良債権が湧いてくる」という批判もある。

与党内の抵抗勢力との戦い

「自民党を壊してでも改革をやり遂げるというから、小泉さんを支持した」―新聞の投書欄には、こんな声が多い。

鳩山民主党代表は「小泉さんの仮面をかぶった抵抗勢力がたくさん当選した」という。事実、小泉人気に乗っかって、郵政民営化反対派や、建設、土地改良などの既得権益団体バックの当選者もいる。これらを支持団体にもつ橋本派は二十人当選、自民当選者の三分の一をしめる。これらが「改革」の抵抗勢力とならないか、国民の視線が集まる。

危機切り抜けるねばり発揮

アメリカのＩＴバブル崩壊に伴い世界同時不況の懸念が漂う。小泉首相がジェノバ・サミットで公約した「骨太の改革」による日本の経済の回復は、いまや国際的な使命となった。

改革を成し遂げるには年期が要る。社会構造そのものを一つひとつ変えねばならない。

五十六年前、終戦の夏も暑かった。イモの茎と雑炊で飢えをしのぎ、ドン底からはいあがり、今日の日本はわれわれが造ったのだ。ねばりと度胸は身についてる筈だ。日本人は危機に強い。なあに、これからが本領を発揮するときだ。